

## 平成24年度学長裁量経費研究推進支援プロジェクト研究成果報告書

### 1. 研究の概要

プロジェクト名	知的に考える子どもを育てる教育活動の創造		
プロジェクト期間	平成23, 24年度		
申請代表者 (所属講座等)	校長 飯田 慎司	共同研究者 (所属講座等)	東 博臣, 谷本 一樹, 河鍋 有一, 岡山 昌司, 川上 圭子, 永井 弘毅, 古賀 弘行, 姉川 左希子, 高口 直喜, 岡 佐智代, 井手 則男, 秋吉 留美子, 杉本 敏則, 松尾 憲雄, 椎窓 敏広, 磯田 哲郎
取組方法・取組実績の概要	<p>平成24年度においては、大きくは以下の2点の取り組みを行った。</p> <p>① 平成24年度 教育実践研究会（平成24年2月1日（金））において、地域の先生方へ研究内容を発信する。</p> <p>② これまで（平成21年度～平成23年度）の取り組みを本校の著書としてまとめたものを基に、言語活動の充実を中心とした研究内容を発信する。</p> <p>この取り組みの中で、プロジェクト名に示す子どもの姿を目指すべく、新学習指導要領の趣旨にもある「言語活動の充実」に焦点化した研究を行ってきた。言語活動という広い概念を焦点化するために、各教科等の特質に応じた言語活動の工夫とは何か、それぞれの教科等で具体化し、教材開発を中心に教育実践研究会で発信できるように平成23年度より継続して研究してきた。</p>		
研究成果の概要	<p><b>1 研究成果</b> 研究の成果としては次のようなことが挙げられる。 ○教科等の特質に応じた言語活動の工夫を具体化したことで、まず、自分で考えを作る、そしてそれらを出し合って交流するといった、これまでの形式的な授業から脱皮することを目指した。本年度は特に授業の導入場面での教材化の在り方、さらに学び合ったことをどう活用するかに焦点化したことで、目的意識の重要性と連続・発展的な言語活動を仕組む重要性が明らかになった。 ○教材化の工夫を通して「目的」「根拠」「協同」が教科等の本質となる内容を捉える際に重要な条件であることが明らかになった。授業のねらいを明確にし、言語活動が目的とならないようにする必要があることが明らかになった。</p> <p><b>2 研究成果の生かし方</b> 平成23, 24年度の研究成果をこれからの生かしていくために次のようなことを行う。 ○研究発表会を行い、言語活動の充実の仕方について、昨年度まで取り組んだ具体的な実践を使って地域の学校へと発信していくようにする。 ○著書を通して具体的な各教科等での言語活動の具体的な工夫の仕方について、その研究内容を広く発信していくようにする努力を継続する。</p> <p>このように、研究発表会や研究成果をまとめた著書によって、公立学校の研究の視点に資することのできるようにしていく。また、具体的にになった個人研究についても学会等で発表できるようにしていく。</p>		
外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法等について〔 <input type="checkbox"/> （該当事項）にチェックをお願いします。〕			
外部資金獲得申請（予定）	<input checked="" type="checkbox"/> 科学研究費補助金 （奨励研究全員申請） <input type="checkbox"/> 受託研究費 <input type="checkbox"/> その他 （                                   ）	研究成果の公表方法（予定）	<input type="checkbox"/> 学会（国内・国外）： <input checked="" type="checkbox"/> 新聞・図書・雑誌論文等：平成24年度研究成果報告書 <input checked="" type="checkbox"/> その他：平成25年度教科等実践研究会(H25.6)